

# 個人資産2000兆円の憂鬱

生きたお金の使い方によって

豊かな歴史が育まれていく

いつから日本人はお金を使わなくなったのだろうか。積み積もった個人の金融資産は、およそ2000兆円。少子高齢化とデフレの悪循環が続くなかで経済は停滞し、私たちは過度の生活防衛本能を身につけた。そして「お金の使い方」を忘れてしまった。

2021年12月4日、徳島市の徳島県教育会館。大ホールに響き渡ったのは、愛いを帯びたオペラの歌声だった。国内外で活躍するプロの歌手だった。1年間みっちり練習を積んだ市民有志の合唱が重なり合う。

「おもしろいよね。オペラとは全く無縁だった徳島の人たちが夢中になっている。文化って、本当にすごいよ」。仕掛けたのは、日本に長期投資の理念を持ち込んだ、さわかみ投信の創業者、澤上篤人氏。オペラの振興財団を自ら設立し、全国各地で住民を巻き込んだオペラの普及活動を展開する。

21年夏に澤上氏が同投信の会長職を

退いた理由を尋ねた時のこと。思わぬ答えが返ってきた。「長期投資はお金を貯めるだけじゃない。貯めたお金を使って社会を豊かにすることがゴール。これからはカッコいいお金の使い方を見せなきゃ。まだまだ道半ばだよ」

戦後復興期から高度成長期にかけて、日本人はひたすら貯蓄に励んできた。21世紀に入って経済成長が行き詰まると、今度は自助努力の名の下に、老後の資産形成へと駆り立てられた。そこには、お金を使って豊かな暮らしを紡ぎ出すという本来の目的が存在しない。積み上がった2000兆円はそのことを寡黙に物語る。

日本人がお金を使うことに夢中になった時代がなかったわけではない。1980年代後半のバブル期だ。人々は高級車や装飾品、美術品を買いあさり、企業も米国のシンボルであるロックフェラーセンターやコロンビア・ピクチャーズ・エンターテインメントを買収す

るなど、ジャパンマネーが世界を席巻した。

バブル期に旧安田火災海上保険が買入れたゴッホの「ひまわり」。社長として購入を指示した故藤康男氏から生前、こんな話を聞いたことを思い出した。「企業が名画に投資して一般に公開するのは素晴らしいことだと思う。でも投機目的で買った、社長室に飾ったりするのは、企業メセナでも何でもない」。バブル期に日本に入ってきた高額絵画のうち、今も購入者の手元に残るものは「ひまわり」など数点しかない。

バブル期の放漫な消費行動を経て、日本人は生きたお金の使い方を学んだのだろうか。そのことを振り返り、考える余裕もないまま、バブル崩壊後は再び生活防衛を強めることになる。

手取り収入に占める消費支出の割合を示す平均消費性向は、70〜80年代は70%台後半だったが、直近は60%台と歴史的な低水準に沈む。将来不安にコロナ禍も重なり、お金を使うアイデアはなかなか湧いてこない。

だが、生きたお金の使い方を探る試みも芽吹きつつある。若い世代を巻き込んで関心が高まったSDGs（持続可能な開発目標）活動。その体現方法の一つとして注目されるのが、応援したい事業者にお金を投資するクラウドファンディング（CF）だ。

日本でのCFビジネスの先駆けでもあるミュージックセキユリティーズは、地域振興や環境保全、文化活動などに取り組む事業者への投資を個人に促してきた。社長の小松真実氏は「SDGsの影響もあり、経済的リターンだけでなく、むしろ社会的リターンに満足感を求める人が増えている」と手応えを口にする。

徳島市のオペラ公演もクラウドファンディングが屋台骨を支えた。地元の人たちを中心に、300万円を超える資金が集まり、本格的な舞台美術やピアノに管弦楽器を交えたアンサンブルを加えることができた。

澤上氏はカッコいいお金の使い方、基準はないと考える。「もちろん貯めたお金でせいたくするのは自由。でも願わくは社会を豊かにするためにも、お金を使ってほしい。そんな大人がたくさんいる社会で育つ子供たちはきっと幸せだと思うよ」

芸術の都フィレンツェの礎を築いたメディチ家のように、生きたお金の使い方によって豊かな歴史が育まれていく。個人資産2000兆円の節目に際し、そのことに目を向けたい。

小栗太



徳島市のオペラ公演はクラウドファンディングなどで市民がお金を出している川公益財団法人さわかみオペラ芸術振興財団提供